

子育て後の仕事復帰

会員 増渕 浩美

要 約

仕事を続けるか、家庭に入るか、女性なら一度は悩んだことがあるのではないだろうか。私の場合、家にいて子供達を「お帰り！」と迎えてやりたかったので、迷いながらも仕事を中断した。とはいえ、子供が大きくなるにつれ、退屈な日々が待っているのだらうなと考えるようになった。一旦家庭に入ってしまうと、仕事に復帰するのは難しい。受け入れてくれる職場はあるだろうか、家事との両立は可能だろうか、と不安は尽きない。そんな不安を抱えながらも、一念発起して弁理士の資格を取得し、周囲の後押しもあって仕事に復帰することができた。子育てを優先したことで、かなり遅いスタートとなったが、たとえブランクがあっても仕事のチャンスはある、ということ、自身の経験を通して示したいという思いで奮闘する日々である。読者の皆様の周りに、仕事復帰を目指す女性がいれば、是非とも私のような例があることを紹介して欲しいと思う。そして、家庭に埋もれたより多くの女性が、仕事に復帰して活躍されることを願う。

目次

1. 自己紹介
2. 子育て後の仕事復帰を経験して
 - (1) 仕事を辞める決心
 - (2) 仕事復帰の難しさ
 - (3) 弁理士への挑戦
 - (4) 学び続けること
 - (5) 逆境は順風
 - (6) 働きやすい環境のために
 - (7) 働き方の変化に備えて
3. 終わりに

きな不安があったが、周囲の協力のおかげで、知財業界に入り新たなスタートをきることができた。仕事と家庭を両立させる上で、結婚や出産のタイミング等に悩む女性が多いと思うが、私のような例もあることを知って頂き、自分なりの働き方を見つけてもらえればと思う。これまでの経験を踏まえ、反省する点、気を付けてきたことなどを紹介したい。

2. 子育て後の仕事復帰を経験して

(1) 仕事を辞める決心

息子が小学校4年生になり学童を卒業した。3時か4時には学校が終わって帰ってくるため、家の鍵を持たせることになる。学童に通っていた頃は、友達と自由に遊ぶことができず、その反動もあってか、放課後、友達と遊ぶのが楽しくて仕方ないらしい。ある日、仕事から帰ると、家の鍵が玄関のドアに挿されたままだった。「やっぱり、仕事は続けられないかなあ…」と感じた。病気の場合は、遠くから母や義母に手伝いに来てもらったが、鍵の管理や下校後の怪我など、近くに手伝ってくれる人がいないと、心配なことも多い。

小1の壁という言葉をよく聞くが、学童を終えたときの小4の壁もあるように思う。行動範囲が広がり、自由な時間も増えるので、特に男の子は心配だ。携帯を持たせても、家に置いて遊びに行ったり、なくした

1. 自己紹介

大学卒業後、電機メーカーに就職し、主にソフトウェアの開発に携わってきた。その間、結婚、転職を経て、2回の育児休業を取得し、子供達は保育所に預けて仕事を続けた。下の子供が小学4年生になり学童（主に日中保護者が家庭にいない小学生児童に対して、放課後に適切な遊びや生活の場を与えて、児童の健全な育成を図る保育事業の通称。）を終える頃、仕事を辞めて主婦業に専念した。保育所と学童にお世話になった子供達も、今は大学生と中学生になっている。仕事を辞めた後は、主婦業の傍ら細々と勉強を続け、弁理士試験の合格を機に仕事に復帰した。

約4年のブランクの後、仕事に復帰することには大

りと、ほとんど役に立たなかった。小学校の間は、家に居てやったほうが良いのではという気になった。

幸い、息子の場合は、近所の友達のお祖母ちゃんにお世話になり、なんとかしのいできた。また、勤めていた会社の理解もあって、在宅勤務をさせてもらったりもした。

しかし、娘が学童を卒業したときには、やっぱり家に居てやろうという思いが強くなった。昔と違って不審者の話もよく耳にするし、中学生の息子は部活で帰りが遅く、娘を一人で留守番をさせるのは心配だったからだ。仕事を辞め、家庭に入る決心をした。

(2) 仕事復帰の難しさ

仕事を辞めてしばらくの間は、専業主婦の生活を謳歌していたが、だんだんと退屈になってきた。社会との繋がりが、子供を通じた繋がりにだけになってしまい、世間から取り残された気分になる。家庭に入ってから、そう感じる女性が多いと思う。自ら外に出ていかないと、話し相手が子供と主人だけという状況になる。仕事を辞めてから、「最近、大人の女性と話していないな。」と、ふと思うことがしばしばあった。子供の友達のお母さんと話す機会はあるが、子育ての話が中心だ。仕事を通じた社会との繋がりがなく、その点に物足りなさを感じるのだろう。子供が大きくなったら、いつかまた仕事に行きたいと思うようになった。

しかし、仕事を辞めて家庭に入ってしまうと、仕事に復帰するのは難しい。復帰するには、かなりの気力が必要だ。仕事を辞めることなく両立ができれば良いが、子供の病気や夫の転勤等、いろいろな事情で仕事を続けられなくなる場合がある。育児休業後に元の職場に復帰できるように、育児に限らず、やむを得ない事情で長期間休業した後、以前の職場や同じ仕事に復帰できるような支援や仕組みがあればと思う。復帰しやすい環境が整えば、埋もれた人材である女性達の活躍の場が広がるのではないだろうか。

(3) 弁理士への挑戦

仕事を辞める前の話に戻るが、娘の保育所、初日。娘と同じ2月入所のお友達は、他にも2人いた。入所手続きの書類を書きながら、「何処かで会ったことがあるなあ…」と、手続きに来ていたお母さんの1人が気になった。丸1日悩んで、やっと思い出した。大学の同級生だったのだ。卒業後は地元を離れ、昔の友人に

会う機会はほとんどなかったもので、地元から遠く離れた保育所で学生時代の友人に再会することは想像もしなかった。その彼女が弁理士として仕事をしていた。当時は、自分が弁理士を目指すことになるとは思ってもよらなかった。

仕事を辞めて、また仕事に行きたいと思い始めた頃、どんな仕事なら復帰できるだろうかと考えた。長いブランクや年齢を考えると、何か資格でもないと難しいだろうなと思ったとき、弁理士のことが頭をよぎった。試験の概要を見たときは、今更無理だなと思ったが、子供が自立した後のことを考えると、もうひと頑張りしようかなという気持ちがうずうずしてきた。友人の後押しもあり、挑戦する決心をした。

ただ、家族には迷惑をかけない範囲で挑戦しようと考えていたので、通信教育で、昼間、細々と勉強を続けた。中途半端な勉強では受からないとはわかっていたが、子育てのストレスもあって、なかなかはかどらず、合格までかなりの期間を要した。遅いスタートになってしまったが、私にとっては、子育ても落ち着き、ちょうど良い時期に仕事に復帰できたと思っている。

(4) 学び続けること

子供を保育所に預けて仕事を続け、また、一旦家庭に入った後、仕事に復帰するという経験を通して、一つ言えることは、どんなに忙しくても学ぶ努力を続けるべきだということである。子育て中は、目の前のことで精いっぱい、自己研鑽に時間を費やす余裕がない。それでも、社会に出て仕事を続ける以上、学ぶことは不可欠だと実感する。振り返ってみれば、私自身、そういう努力が足りなかったと反省している。

たとえ少しずつであっても、学ぶ努力は続けたいと思う。すぐに行動に移せなかったとしても、学ぼうという気持ちは持つようにしている。気持ちがあれば、行動は後からついてくると思うからだ。

とはいえ、新しいことを始めても、なかなか時間が取れず、すぐには成果が上がらない。得意なことは少し頑張ればすぐにできる場合もあるが、苦手なことや新しく始めたことは少々頑張ったくらいではどうにもならない。ただ、苦手なことや新しく始めたことでも、あきらめずに積み重ねていけば、いずれはできるようになるのではないかと思う。苦手なことを克服しようと努力するうちに、その道のプロになったという話は、しばしば耳にする。

私は、話すことも、書くことも得意なほうではないが、弁理士の仕事を通じて克服していきたくて思っている。小さな積み重ねを大切にして、得意に変えていけたらと思う。

また、学ぶといっても、直接仕事に関係することではなくても、家事にしる、趣味にしる、一生懸命やってみると学ぶことは多い。料理や掃除等の家事は面倒だが、ちょっとした工夫で、おいしい料理ができたり、家の中がきれいになったりすると、多少は楽しくなる。特に、料理は数多くの工程を含み、複数の料理を同時に完成させるためには、計画的に段取りよくこなす必要がある。料理は段取り力が鍛えられる作業であり、子供にも料理をさせると良いそうだ。

それから、趣味に打ち込むことも、ストレス発散になり、時間を作る工夫をするようになる。時間管理にも敏感になれる。時間に追われる毎日でも、自分の成長のために、ほんの少しでも時間を割けるようにしたい。

(5) 逆境は順風

女性の場合、新たな仕事のチャンスがあっても、家庭の事情等の理由であきらめざるを得ない場合が出てくる。仕事のチャンスを逃すことが多いと感じる方も多いのではないだろうか。

保育所の送り迎えがなければ…、食事の準備がなければ…、とついつい不満が出てくるが、こうだったら良いのと思っても、どうにもならないことは山ほどある。どうにもならないことに不平不満を言っても、何の解決にもならず、不平不満に無駄なエネルギーを費やすばかりだ。

無駄にエネルギーを費やすのであれば、開き直って逆境を受け入れ、その中で最大限にチャンスを活かすことに注力したいものだ。逆境は、決してハンデではなく、追い風になってくれる。追い込まれたほうが、少ないチャンスを活かそうとするし、限られた時間を有効に使おうとするからだ。

時間というのは、あればあるだけ使ってしまう。「仕事量は、与えられた時間を使いきるまで膨張する」(パーキンソンの法則というのだそうだ)と聞いて、もっともだと納得させられた記憶がある。時間が限られているからこそ、効率良くできている面もあるだろう。また、限られたチャンスをキャッチしようとアンテナの感度も良くなるだろう。逆境は、やる気を後押

ししてくれる順風であり、逆境というのは恵まれた状況なのである。

(6) 働きやすい環境のために

女性が長く仕事を続けるためには、働きやすい環境の整備が必要だ。そのためには、様々な働き方が受け入れられ、それらの働き方に合った整備がされなければ意味がない。私が在宅勤務をしたときの例を紹介したいと思う。

私は、結婚を機に転職を経験している。元の職場にとどまることも考えたが、専門的な仕事を深掘りするよりも、規模の小さな会社に入って、経験の幅を広げたいと思ったからだ。

転職先では、既婚の女性社員がいなかったため、出産や育児の不安はあったが、幸い上司にも恵まれ、2回の育児休業を取得することができた。とはいえ、周りに育児休業の取得をされた方はおらず、復帰後は、限られた時間内で仕事がこなせるのだろうか、仕事についていけるだろうかと不安は大きかった。さらに、2回目の育児休業の前には、1年も休まずに短い期間で復帰すべきだろうか、やはり仕事はやめようかと迷うことも多かった。

最初の育児休業から復帰して間もなく、子供がはしかにかかった。少なくとも1週間は休むことになる。無理を承知で、在宅勤務が認められないか打診してみた。急なことであり、やはり認めてもらえなかった。結局、母と義母と交代で、泊まり込みで看病に来てもらった。

子供が小学校に上がると、PTA活動をはじめ、平日に学校に行く機会が増える。小学校のPTA活動は、下のお子さんが幼稚園に行っている午前中に集まりがある場合がほとんどだ。6年間で一度は、委員活動をしなければならず、私もバザー委員を引き受けた。通常の委員なら、月に1、2回程度の活動で、休暇で対応できるだろうと考えていた。しかし、委員長、副委員長、会計の三役をくじ引きで決めると、運悪く副委員長に当たってしまった。仕事があるので活動は週末にしてほしいと言ったが、それはちょっと…といった反応だった。見かねた会計の方が交代してくれたため、副委員長は免れて少しは負担が軽くなった。それでも、週に1、2回は集まるという。

このとき、最初に在宅勤務を打診してから5、6年は経っていた。前回同様、認められないことを覚悟で、

再び上司に相談してみた。時代の流れもあったのか、バザーまでの期間限定で、週1回の在宅勤務を認めてもらうことができた。今ほど、情報漏えい等のセキュリティに関して厳しくはなかったが、貸与されたパソコンで作業をし、作業報告書を提出するという形を取った。期間限定で始めた在宅勤務だったが、特に支障はないということで、バザーの後も継続し、最終的には週2回の在宅勤務をさせてもらえるようになった。

先日、その会社の後輩に会った。彼女も2人の子供を出産し、2度の育児休業を取得していた。私が退職したあと、しばらく在宅勤務をした方はいなかったそうだが、後輩が私の例を話したところ、私が在宅勤務をしたときの記録を調べた上で、在宅勤務が認められたとのことだった。少しでも後輩の役に立つ前例を作ることができて嬉しく思う。こういった前例を積み重ねていくことで、女性が働く環境が徐々に改善されていくことを願う。

さらに、子育て後の女性に限らず、病気等の理由で、仕事からしばらく離れた人達が、いつでも、何度でもチャレンジができ、その挑戦が受け入れられるような社会になって欲しいと思う。

今の私は、長いブランクを経てからの仕事復帰、という新たな前例を作りたいという思いで、日々奮闘している。子育てがひと段落したとはいえ、思春期の子供に対しては、また違った苦労がある。さらに、親の介護の問題も出てくるだろう。女性にとっては家庭での負担がなくなることはなく、続けられるかどうかという不安はぬぐえない。一つ一つ乗り越えていくことで、女性が仕事に復帰しやすく、働きやすい環境が整備されるきっかけにつながればと思う。

そのためには、働く側も最低限の責任が果たせるように努めたい。最近では、家庭と仕事の両立に対する周囲の理解も大きいですが、家庭の事情を理由に、周囲の理解に甘え過ぎないように心がけている。男性であっても、家庭を持てば家族のための時間が増える。仕事上では、家庭の事情に関係なく、男性も女性も同じ重みの責任を負っている。実際には、家庭の事情で迷惑をかけてしまうことも多いと思うが、同じ責任を負っていることは肝に銘じたい。

(7) 働き方の変化に備えて

結婚や子育ての時期は人によってまちまちだ。女性

の多くは、いつ結婚や子育てをするか迷うことも多いだろう。特に子供が生まれると、何らかの形で、仕事が中断されたり制限されたりすることは避けられないからだ。

私の場合は、無計画に家庭に入ってしまった面があり、少し反省している。たとえ復帰を考えていなくても、復帰に備えて、積極的に仕事で実績を積んでおくべきだったかなと思う。当時は、家庭と仕事の両立で精一杯で、先のことまで考える余裕がなかったのが正直なところだ。

周りを見てみると、子供が大きくなってから、仕事を始めるお母さん達は非常に多い。ただ、以前の職場に戻ることはなく、パートや派遣として働くのが一般的だ。正社員として就職するのは難しいからだ。やりたい仕事に戻れるよう、できる限りの準備はしておきたいものだ。

もちろん、家庭の事情によっては、フルタイムで働くのは難しく、時間に融通のきくパートとして働くという選択肢もあるだろう。結婚、出産、介護など種々の事情に柔軟に対応できるよう、計画性を持って働き方を見直していくが必要になると思う。

私の場合、遅いスタートではあるが、幸いにも、受け入れてくれる事務所があり、弁理士としての新たな一歩を踏み出すことができた。ただ、子育ては継続中であり、いずれ介護の問題も出てくるだろう。再び、仕事を中断せざるを得ない事情が生じる可能性もある。色々な選択肢を考え、準備しておくことができればと思う。

3. 終わりに

家庭と仕事を両立させるためには、どうしても周りの協力がようになる。頑張りすぎて息切れしないためにも、一人で抱え込まずに、周りに頼ることも大切だ。

私も、子供達が病気の時には、実家から母や義母に、泊りがけで看病にきてもらっていた。近所の方に預かってもらったこともある。友達のお母さんに助けってもらうこともある。数年前、両親が近くに引っ越してきてくれたおかげで、子供達が大きくなった今でも助けられてばかりだ。また、一番身近で支えてくれる家族の協力も不可欠だ。

今は、助けられてばかりで後ろめたい思いをしているが、いつか助ける側になる日も来るだろう。お世話になった方に、直接お礼はできないかもしれないが、

私自身が助ける側となったとき、自分がしてもらったことへの感謝を次の世代に伝えていければと思う。

そして、長いブランクにもかかわらず、また、就業時間等に制約があるにもかかわらず、受け入れて下さった事務所にも感謝したい。私が、大学を出て初めて就職した頃に比べると、いろんな働き方が受け入れ

られる社会になりつつあると実感する。何等かの事情で、一旦仕事を離れた女性にも、多くの協力者を味方につけて、是非仕事に復帰してもらいたいと思う。より多くの女性が輝ける社会になることを願っている。

(原稿受領 2015. 5. 30)

パンフレット「弁理士Info」のご案内

内容

知的財産権制度と弁理士の業務について、イラストや図を使ってわかりやすく解説しています。

一般向き。A4判30頁。

価格

一般の方は原則として無料です。

(送料は当会で負担します。)

問い合わせ/申込先

第3事業部 広報・支援室

e-mail: panf@jpaa.or.jp

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-4-2

電話: 03(3519)2361(直)

FAX: 03(3519)2706

